

# ことばの迷い道

先生、僕にはアブガイが  
3人いるんだよ

しまむら いっぺい  
島村 一平

民博 超域フィールド科学研究部

モンゴル高原は広い。ロシアのシベリアからモンゴル国を経て中国の内モンゴルまで国境に跨って草原は延々と続いている。当然、「モンゴル人」と自称する人びとも国境に跨って暮らしている。そんな広いモンゴル世界を旅していると、「方言」の違いに驚かされることも少なくない。例えば、社会的地位が高い「えらい人」のことをモンゴル国では「大きな(トム)長(ダルガ)」と言う。ところが内モンゴルに行くと「ブドゥンな長(ダルガ)だ」という言い方をする。このブドゥンとは「太った」という意味の形容詞である。むかし、内モンゴルでフィールドワークをしていて、「今からブドゥンな長と会う」と聞かされて、細身の人が出てきて面食らったことがあった。

さてモンゴル国の国語(モンゴル語ハルハ方言)に「アブガイ」ということがある。妻を意味する語なのだが、ちょうど日本の関東地方の「カミサン」や関西地方の「ヨメ」「ヨメハン」のように、夫がもっぱら自分の妻のことを他者に語るときに使うことばである。具合の悪いことにアブガイは「カミサン」「ヨメ」の他に「中年女性」という意味もある。さしずめ「オバサン」や「オバハン」に相当する語といえようか。というわけでアブガイということばは、モンゴルの女性たちにすこぶる評判が悪い。一方、モンゴルの男たちは「アブガイ」ってのはな、アブ(貰え)・ガイ(害)っていうくらいだから、害なんだよ」という俗説をもっともらしく話す。たいてい男の妻がいなるときに限って。弁護士や医者、学校教師のおよそ七割が

女性、という女性の社会的地位が高い国ならではの、男のうさ晴らしなのである。

が、ここで紹介するのは、別の意味の「アブガイ」。じつは、マイノリティのブリヤート人のあいだでは「姉」のことを「アブガイ」と言う。今から二〇年ほど前、モンゴル国のドルノド県の北部(ブリヤート人居住地域)でフィールドワークをしていたときに聞いた話だ。地元の小学一年生の男児(ブリヤート人)が、「先生、僕にはアブガイが三人いるんだよ」と担任の先生に話した。もちろん彼は「姉」という意味でアブガイということばを使ったのだが、教師は首都ウランバートルから赴任してきたハルハ人女性(モンゴル国の人口の八〇パーセント強を占めるマジョリティ)だった。

驚いた彼女は「なんてことを言うの! あんたは小さいのに奥さんが三人もいるなんて、ふざけるのもいい加減にしないで!」と男児を叱りつけた。ブリヤート語を知らないハルハ人の女性教師はアブガイを「妻」だと理解したのである。しかし、ブリヤート人の男児は自分が何で怒られたのかもわからずに、口をばかんと開けていたのだという。内モンゴルで、西部地方の出身者の方から「うちのバブガイ(妻)を紹介します!」と言われ、びっくりしたことがある。モンゴル国のハルハ方言では、「バブガイ」とは「熊」のこと。どんな人が出てくるかと思いきや、これまた細身のすらっとした方でびっくり。日本語でもひとむかし前には「うちのヤマノカミ」なんて表現があったが、「うちの熊」って!! 「方言」は怖い。